



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生の自主活動における自己形成
Author(s)	井上, 大樹
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 84, 183-208
Issue Date	2001-12
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.84.183
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28838
Type	departmental bulletin paper
File Information	84_P183-208.pdf



高校生の自主活動における自己形成

井 上 大 樹

Identity Formation of High School Student in Autonomous Activity

Hiroki INOUE

目 次

はじめに —— 課題と方法 ——	183
I 青年期教育の課題	184
II 自主活動の意義と「北海道高校生の広場」	185
1 高校生の自主活動における近年の傾向	185
2 概要	186
3 実践経過	186
4 意義	189
III 「北海道高校生の広場」における高校生の学習過程	189
1 聞き取り調査の概要	189
2 「広場」・S商内自主活動への関わりの経緯	191
1) S商実行委員	191
2) 顧問N氏	193
3 個人の実践過程と意識変化	194
1) Aの場合	194
2) Bの場合	199
3) Fの場合	200
4) Gの場合	201
4 「広場」実行委員の学習過程	202
IV 自主活動における高校生の自己形成過程	202
おわりに —— 小括 ——	205

はじめに —— 課題と方法 ——

近年の日本では、青年期の枠組みの危機⁽¹⁾が言われて久しい。バブル経済崩壊以降、就職難は深刻化する一方であり、学校から企業社会へ移行する形で経済的自立をとげ大人になる既存の社会的枠組みから、青年層そのものが疎外されつつある。このことから、学校で真面目に学ぶことによる報償が得られなくなる昨今、学びからの逃避⁽²⁾をはじめ、不登校・ひきこもりなど、社会的関係そのものを遮断するような現象まで進行している。

しかし、1990年代にも薬害エイズ問題の取り組みや阪神大震災などのボランティアに自主的かつ協同して活発に社会参加をしている青年が存在していた。また、少数ではあるが、高校においても生徒会による自治活動のみならず、さまざまな形態をとって自主活動が多様に発展している⁽³⁾。このことは、人間的要求と現状の矛盾が集中した青年期にどのような教育実践(矛盾を克服すること)の契機があるのか検討する余地が含まれていると言えよう。

筆者の研究課題は、自主活動をととした高校生の自己形成を検証することから、青年期的人格形成を保障する教育的課題を明らかにすることである。本論文では、高校生の自主活動の事例検討を通じて、青年期には不可欠な「自己形成」への学習過程を明らかにし、今後の青年期教育実践理論への展望を明らかにすることを試みた。

I 青年期教育の課題

思春期、青年期における人格再統合は現代の社会で大人として自立する上で欠かせない課題である。しかし、現在の学校内外における日常生活では、内なる他者に「権力的なもの」を取り込まざるを得ず自己肯定感の喪失につながる。それは、授業などにおける学校的価値観は忠誠競争、友人との遊びなどにおける反学校的価値観は同調競争のもとに身をさらすことになるからである。このようにして、人格形成の基礎にあたる価値を外的なものにゆだねる形態で思春期、青年期を過ごさなくてはならず「自分づくり」が一向に進行しないのである。すなわち、自分探しの模索を希望しつつも学校的価値観や商業的価値観に囲まれた日常生活(学校や友人関係)でそれが阻まれ、青年期の自我の維持を一層困難にしている。自己を取り巻くあらゆる関係が強制的な別世界の価値観同士であり、これらの価値観を取り込んでしたたかにふるまう生活が自己の感情すらはるか後景に追いやり、自ら判断できる力をほとんど失っているのである⁽⁴⁾。

このことから、これらの価値観からの解放と青年期の自己形成にいたる学習の保障が今後の青年期教育の一番の使命といえよう。高校生の自主活動では、校内外における個別の自主的学習活動、学校参加、社会参加やそれらをネットワークする学校間交流活動などを通じ、自立の拠点が形成され、その教育的機能によって学校などの制度や文化を変える力を得、それを発揮することで高校生の自己形成を育む可能性がある。しかし、現状ではクラスや部活など一つの既成の集団や場だけで、既成の価値観を相対化する学習を組織するのは、条件や教師などの支援者の意識、場における友人関係の質から考えても非常に困難なことである。そこで、これらの価値観への判断を留保できる場からの実践が考えられる。すなわち、学校的価値と切り離され、日常的な私的集団とも異なる活動・学習の集団によって自己形成を可能にする実践を重点にすることが求められるのではないだろうか。筆者はこれまでも、日常の学校生活および私的な生活と異なる実践形態をもつ自主活動にこそ自己形成の可能性を見出し、その過程から青年期教育実践を検討することが必要であると考えてきた。

すなわち、学校などの現在の生活世界、これから生活するであろう地域、社会で自分はどのように生きていくかということを見通せる、青年期の自己形成を保障するような教育実践が学校、地域、社会を貫いて構想されるべきではないだろうか。その実践によって、教科学習、教科外学習(生活指導)実践が統一されるとともに、高校生にとって自分たちの生活世界としての家庭、地域、学校から、自立の拠点づくりにつながる学習が可能になるのではないか。その

拠点からこそ高校生自身によって自己形成が深められるのではないだろうか。例えば、生徒参画型の授業づくりは自立の拠点の一つになりうるのかもしれないが、自立の拠点から得られた価値が他の場へ浸透する過程を含まなくてはならない。それは、社会力⁽⁵⁾やコミュニケーション能力とも異なり、個々の価値観を交流する力と要求にもとづいて連帯する力である。これらの力を得てこそ、自立の拠点において日常生活の矛盾から解放される。このようにして、実践の中に自己形成への学習過程を含むことが青年教育実践に不可欠であるといえよう。

II 自主活動の意義と「北海道高校生の広場」

1 高校生の自主活動における近年の傾向⁽⁶⁾

1990年代に入り、高校生の自主活動は従来の学校自治を追求する取り組みの枠を越え、特に父母との連帯や地域とのむずびつきを強める傾向が見られる。高校生の自主活動は学校間交流や地域社会参加が活発になり、学校・社会参加と学習・文化創造活動との複合も目立つ。学校参加においては三者協議会のように父母と生徒の協同が中心であるが、文化・学習活動においては地域住民との協同も目立っている。

つまり、高校生の自主活動には、学校・社会参加活動において地域（Community）に真の対抗文化が形成される学習がなされる中で、青年期の自己形成を深める可能性がある。これらの自主活動に取り組む活発な高校生たちは、一見無関心に見える多くの高校生たちと同じように「（大人たちの）おしつけはいやだ」「学校を楽しくしたい」などという思いを持っている。この要求を生徒が自分たちで組織できるかどうかが自主活動の活性化への鍵を握っている。それは、高校生が普段表現できない自分の価値観（本音）を、様々な価値観を持つ集団（異質共同体）の中で確立し、日常の学校生活にも反映できる取り組みが求められているということである。

一方で、この要求の組織にあたって、活動目的や到達の設定が教師主導であるために、そのメカニズムを生徒がわがものにできないということが多くの自主活動に見られる。このような活動では、関わった高校生の自己実現の領域を拡大させる力をつけるには限界がある。つまり、自主活動そのものもこれまでの形態、方法を常に現役の高校生の批判にさらされるようにし、彼らがそれらを自分たちのものにする過程こそ、彼らの自己形成を深めるのに不可欠なのである。

これから、高校生の自主活動には、学校・社会参加活動において地域社会（Community）で真の対抗文化が形成される学習がなされる中で、青年期の自己形成を深める可能性があるといえよう。ただし、これには子ども権利条約の意見表明権を保障することの具現化のみならず、日常の（学校など）公的私的集団の変革にいたる実践の価値についての理解が得られることが必要である。そのためには、日常の（公的私的集団の）学校などの実践における集団の閉鎖性を克服する必要がある。

北海道高校生の広場はその実践展開から、日常の校内生活においても高校生の自立の拠点となる機能を果たしつつある点でより注目できる。

2 概要

「北海道高校生の広場」(以下「広場」)⁽⁷⁾は1990年代における北海道の高校生による自主活動の代表的な取り組みである。「広場」は北海道の高校生が学校の枠を超えて自分たちで夏、秋に学校や社会のあらゆる問題や文化活動を素材に企画を立案、運営している。毎年、「夏の広場」(以下「夏」)⁽⁸⁾として8月に2泊3日のキャンプ、「秋の広場」(以下「秋」)⁽⁹⁾として教職員組合などによる北海道合同教育研究集会(全道合同教研)の中で高校生の集いを開催している。主に、全道の実行委員会は道央地区(空知, 小樽, 札幌地区)の高校生が担っている。また, 顧問団としてN氏(S商教員)を中心に北海道高等学校教職員組合(道高教組)の教員⁽¹⁰⁾が支援を行っている。(図1)

3 実践経過(表1～3参照)

91秋～94夏の第1期は, 子どもの権利条約の批准運動に軸をおいて展開された。「夏」の企画としては先生が教えたい, 生徒が学びたい授業を展開する, 子どもの権利条約(意見表明権, 教育への権利など)をテーマとした寸劇をグループで作るなどの実践に具体化された。この時期は教師提案が目だったといわれる一方, 生徒の自治の力量が伸びた時期でもあった。「秋」の企画では, 子ども権利条約の意見表明権の具体化を意識し, 校則など日常生活で思っているこ

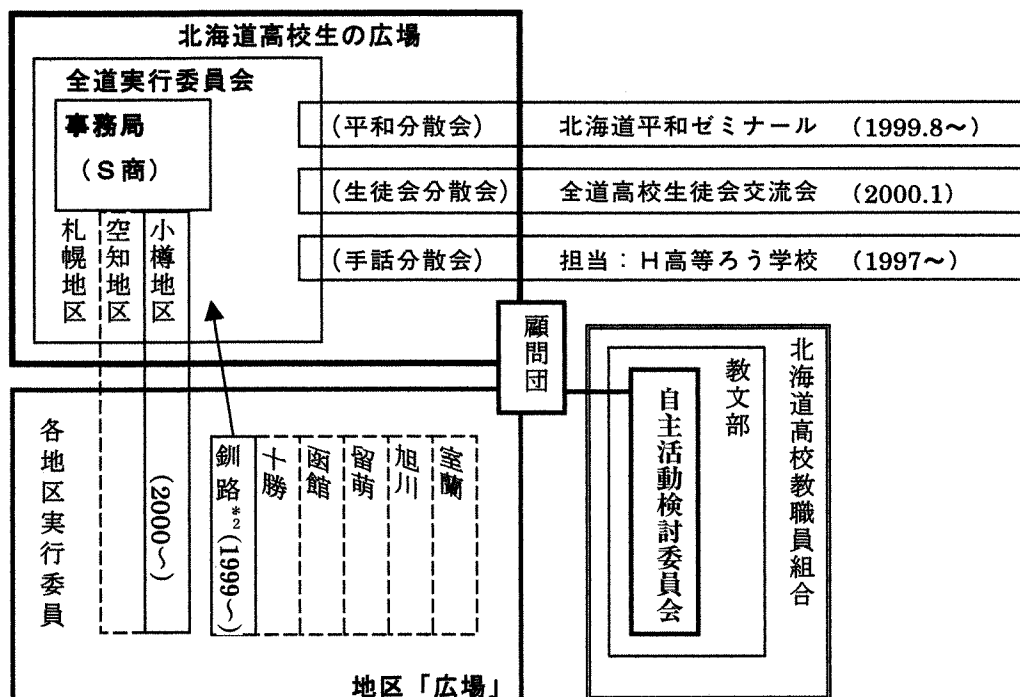


図1 高校生の広場の組織

*1 点線囲みは2000年度現在活動停止中

*2 釧路「広場」実行委員は00夏, 01夏を「夢の学校」として運営

とを率直に語り合う場が設定されている。この場は93秋「バトルディスカッション」で先生など大人へ拡大される。このときは、大人たちが生徒からの鋭い意見を正面から受け止められなかったものの、高校生と大人が対等に意見を表明し「意見表明権の保障とは何か」を教師と始めとする大人たちに問題提起したという点で興味深い。

94秋～95秋の第2期は文化・学習活動が「広場」の取り組みの軸に位置付けられはじめ、「交流」「討論」から「表現」「創造」活動へ広がりを見せた。94秋から始まったビックアートは、現在では「秋」のメインイベントとして定着しつつある。また、「秋」の分散会や「夏」の企画には、「討論や話し合いよりはみんなでものをづくりあげることがしたい」という要求が高まり、

表1 秋の広場の概要

年度	参加校数	参加生徒数	実行委員参加地区	全 体 会 企 画
91	29 校	82 名	空知/札幌	
92		120 名	札幌/空知	前夜祭（演劇，バンド発表）
93		160 名	札幌/空知	高校生ビデオ作品「日記」上映 バトルディスカッション，大交流会
94	45 校	220 名	札幌/空知	スーパー・バトルディスカッション，ビッグアート，大交流集会
95	57 校	180 名	札幌/空知/小樽	大交流集会，平和への祈りアピール
96	40 校	160 名	札幌/空知/小樽	大交流集会
97		200 名	札幌/空知/小樽	高校生文化フェス（演劇発表），ビッグアート，大交流集会
98	30 校	108 名	札幌/空知/小樽	高校生文化フェス，ビッグアート，大交流集会
99	27 校	120 名	札幌	高校生文化フェス（バンド），ビッグアート，大交流集会
00	25 校	140 名	札幌/空知	高校生文化フェス（ゴスペル，よさこい発表） しゃべり場，大交流集会

表2 夏の広場の概要

年度	会場	参加生徒数	主 な 企 画
92	砂 川	32 名	理想の授業づくり，クラス毎の自治活動（1班10人担任つき，自炊と演劇づくり），愛知高校生フェスティバル報告
93	砂 川	48 名	理想の授業づくり，クラス毎の自治活動（自炊と演劇づくり）
94	砂 川	80 名	理想の授業づくり，クラス毎の自治活動（自炊と演劇づくり） 寸劇：テーマ「子どもの権利条約」
95	砂 川	80 名	理想の授業づくり，クラス毎の自治活動（自炊と演劇づくり）
96	上士幌	120 名	熱気球体験
97	余 市	200 名	2日目青空セミナー（和太鼓，阿波踊り，よさこい，余市の史蹟めぐり，中国人強制連行跡のフィールドワーク），成果発表会，3日目いかだくんだり
98	砂 川	160 名	ヨット，カヌー，カート体験，連風あげ 「どんときも」を手話で合唱
99	砂 川	40 名	2日目青空セミナー（よさこい），成果発表会，3日目連風あげ
00	白 糠	42 名	講座「白糠町の歴史」，討論会「高校とは何か？」，選択授業（お菓子，ペットボトル，川釣り，ロウソク・行灯，廃線探索，軽スポーツ），ウォークラリー，「思ひ出コロコロ」

表3 秋の広場の分散会（分科会）構成の変遷

年 度	分散会（分科会）名					
91	生徒会	平 和	人 権	授 業	ボランティア	日の丸・君が代
92	↓	↓	↓	↓	↓	男女交際
93	↓	↓	↓	↓	↓	性&エイズ
94	↓	↓	↓	↓	↓	
95	(平和についての分科会討論)					
96	生徒会	平 和	演 劇	ダンス	フリー交流（男女交際、映画、趣味）	
97	↓	↓	手 話	↓	よさこい	太 鼓
98	↓	↓	↓	↓	↓	↓
99	↓	↓	↓	↓	↓	↓
00	↓	↓	↓	料 理	↓	おもしろ実験

よさこいソーラン踊りや郷土芸能などさまざまな文化活動がこのころから取り組まれるようになる。ただし、95年の一連の「平和」の取り組みについては戦後50年という外的要因が強く反映され、高校生の内在的な要求がどこまで組織されてきたか疑問が残る。

96夏～98夏の第3期は地域との交流が始まるとともに高校生どうしのつながりを見つめなおす課題が表面化していた。この頃から実行委員に対して噴出した「参加者は見るだけのお客さんなのか」という不満には、校内における生徒会役員と会員との関係の問題との共通点が垣間見える。顧問団が組織したとはいえ地域住民との交流もこの頃から始まり、「夏」の開催地のことをより深く学ぶ（体験する）ことができるようになった。98夏の文化講座を通じ地域住民、すなわち地域など学校外の大人たちと「認め合う」関係をつくりあげていた⁽¹¹⁾。また、同じ高校生でも実行委員が参加者の立場に立って考えるようになった。一方で、これまでも志向されていたはずの生徒と教師との「対等・平等」の関係を97夏の初日の出来事で新たに修復せざるを得なくなった。しかしこのことが、「北海道高校生宣言」⁽¹²⁾を生んだ。この「広場」参加者自治の進展には、学校の枠を超えた交流や地域とのつながりをつくり、自治の実践、文化づくりを通じて出会い、つながり、経験を保障された「学びの共同体」がつくりあげられる可能性が示された。しかし、第3期から始まった地域との協同は1回限りでかつ98夏を最後に行われていない。

99秋以降の第4期では、「広場」そのものが存続の危機に陥る中、学校の取り組みを「広場」で発信し、「広場」で得られたことが普段の学校生活に反映するなど、「広場」と日常の学校生活との距離が縮まってきた。すなわち、「広場」の取り組みと学校の自主活動が相乗効果で発展する事例が出てきた。道央地区からの実行委員の不足が深刻化し、全ての企画・立案を実行委員が担うことができなくなった。このことは、「夏」の釧路地区による開催や、北海道平和ゼミナールによる「秋」の平和分散会運営など、担い手になる高校生の層の拡大につながっている（図1）。「広場」の企画そのものはマンネリ、消化主義へ傾倒しているというOB・OGの指摘もあるが、分散会や文化発表に学校の取り組みや（「バンド演奏する場がほしい」などの）要求を取り入れていくことで実行委員や参加者にとって身近なものになった。すなわち、生徒が「広場」で学んだことや得られた自信を自分の学校の中で発揮しようとし、またその逆の動きも多

少なりとも見られる。

第3期までの「広場」的機能は、学校、資本から高校生の公的私的のさまざまな集団にかかる同調圧力から解放された交流を通じて独自の文化を創造することであるといえよう。第4期ではこの機能が一つの取り組みを通じて校内に波及する可能性や、逆にこの機能をもつ校内の実践を「広場」で応用することで内実化する可能性を持つといえよう。この典型的な例が99秋～00秋にかけて事務局であったS商の実行委員による9.24教育運動大集会（9.24）⁽¹³⁾のゴスペル発表の取り組みなどにみられる。

S商ゴスペル愛好会は、2000年度の事務局の高校生たちが、クラスや部活の枠を越え、楽しい「合唱」をしたいと立ち上げた会である。この活動に関わったのは事務局の生徒たちと同じ3年生がほとんどであるが、事務局の生徒と直接の接点がない生徒もメンバーの約半分である。9.24では40名余りが参加したが、その後は15名で半年に校内外で4回の講演をこなした。この間、地域の劇団やゴスペルの専門家から直接指導を受け、合同講演などで地域のゴスペル合唱団との交流があった。彼女らは2001年4月に卒業した後も、青年サークル（Multi Color、社会人11名、学生1名）として週1回の練習と公演活動を継続している。

4 意義

これから、「広場」的機能（効果）として、学校、資本から高校生の公的私的のさまざまな集団にかかる同調圧力から解放された交流を通じて独自の文化を創造することがあげられよう。しかし、それは生徒会連合などと違い一部の顧問教師を中心とする個人が組織者であるため、文化継承・批判的発展の困難がつきまとう。これに対し、第4期では校内実践と「広場」実践の交流をきっかけに、それぞれの実践の往還がおり、「広場」効果が校内に波及する可能性をもちうるといえよう。それは、「広場」に関わった高校生たちが築いた自立の拠点がこれまでの校内生活の文化、価値観を問い直し、高校生の自己形成を保障する方向へ再構成される可能性があるといえる。これは、「広場」の当初の目的である子どもの権利条約の精神の高校への具現化に近づいているともいえ、規模などで停滞期である第4期が「広場」の潜在的な発展の可能性をもっているといえよう。

III 「北海道高校生の広場」における高校生の学習過程

1 聞き取り調査の概要

本論では、「広場」を運営する高校生たちの自己形成過程から自主活動実践の教育的機能をより詳細に検討することを試みる。そのため、2000年度の「広場」実行委員へ聞き取り調査を行った⁽¹⁴⁾。彼らは00秋の実行委員か、S商ゴスペル愛好会の中心メンバーであった（表4、図2）。この調査では「広場」や校内の自主活動を通じ、学校や友人関係などにおける意識の変化過程を明らかにした上で、高校生の自主活動による自己形成過程をまとめた。特に、1999、2000年の事務局員（S商生）の「広場」及び日常生活へのかかわりや（問題）意識の変化と自己形成の深化の過程を詳細に検討したい。中でも、「広場」に関わるきっかけ、「広場」参加経験を重ねる中で「広場」へ関わる動機や目的、実際の関わり方の変遷、学校などに対する考え方の変

表4 2000年度全道実行委員のプロフィール

(S商・事務局)

名	「広場」以外の課外活動	99 夏	99 秋	00 春	00 夏	9.24	00 秋
A	書道部, HR 委員, ゴスペル愛好会	参加	委員長	企画	参加	*○	委員長
B	茶道部, ゴスペル愛好会	参加	事務局長	企画	参加	*○	事務局長
C	家庭科クラブ, ゴスペル愛好会	参加	事務局	企画	参加	*○	事務局
D	ゴスペル愛好会				参加	*○	実行委員
E	軽音部, 女子サッカー同好会	*3合宿	バンド演奏		参加		実行委員
F	軽音部, ゴスペル愛好会	*3合宿	バンド演奏	企画	参加	*○	事務局員
G	書道部, 軽音部, ゴスペル愛好会	*3合宿	バンド演奏	企画		*○	事務局員

*1 課外活動の下線付は三役など部内で中心メンバー

*2 A～G, 3年女子(00年秋)

*3 S商女子サッカー同好会(1999.4結成)合宿練習として参加

*○ 9.24教育大運動集会にゴスペル合唱および群読発表で参加。

(その他)

名	学年*	「広場」以外の課外活動	98 秋	99 秋	00 夏	9.24	00 秋
H (S商)	3	情報処理部, ゴスペル愛好会				*○	ゴスペル発表
I (V高)	2	パソコン部, 新聞局			参加		実委
J (H女子高)	3	元生徒会長	参加	分散会			実委
K (M高)	2	演劇部, 平和ゼミナール		参加			実委

*4 学年は00秋当時

*5 分散会：分散会の運営のみ参加

*6 J, 2001.3卒業後, 地元の私立大学に進学

*7 I: 2001年度全道実行委員長

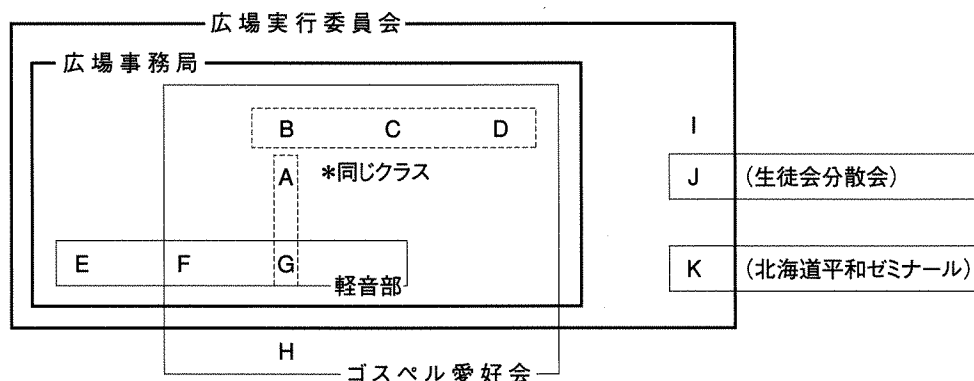


図2 実行委員間の関係

*A, GおよびB, C, Dは2, 3年同じクラス

遷に注目する。本論では、一連の取り組みに深く関わっているA, B, F, Gの4名を中心に取り上げる。後述で、A, B, F, Gそれぞれについて、先述の聞取りの内容を、実践の節目ごとの「広場」、校内の自主活動の動機、関わり、評価の変化や日常生活の諸関係のくみかえへの反映についてまとめた(表7)。

2 「広場」・S商内自主活動への関わりの経緯（表5，表6参照）

1) S商実行委員

「広場」は98秋までの事務局が事実上引退し、1999年はじめは実行委員のなり手がいないという異常事態に陥る。自分の学校からでも多く実行委員を出そうと、N氏は自分の授業時やHRにおける、夏の広場のチラシ配りなど宣伝を強化した。これを見てキャンプや他校生との交流に興味を持ってクラスの友人と一緒に参加する生徒が出てきた。A, B, Cなどは、クラスで一緒に行く人が見つかって参加に踏み切った。このような二人組での参加はS商で8組ほどあったという。彼女らは98夏もこのチラシで全道の高校生が集まるキャンプがあることは知っている場合が多い。

また、N氏は新設の女子サッカー同好会（当時申請中）の顧問になったことを受け、99夏を同好会の合宿として参加しないかEたちに提案した。同好会の生徒は有志参加と練習時間の確保を条件に提案を受け入れた。ここで、Eたち同好会のメンバーやその友人のFなどが2日目の昼間をサッカーの練習で別行動をとる形で参加した。

N氏は参加者を募ると同時に、早くから参加を決めた生徒には事前の実行委員会への出席を呼びかけた。これを受けてB, Cらが直前の実行委員会に出席している。このときの参加者は半数近く（20名以上）がS商であったが、A, B, Cが実行委員・三役入り（A実行委員長, B事務局長, C事務局員）し、S商が事務局を担うこととなった。

実行委員がすべて初参加という中で99秋の準備はすすめられた。これまでの実行委員がすべての分散会まで企画・運営する形は姿を消し、生徒会分散会はH女子生徒会（J他）に、平和分散会は99年の原水爆禁止世界大会に参加した高校生に、手話分散会は高等ろう生に、よきこい分散会はV高OG（実行委員OG）、太鼓分散会は元S商生徒会長が所属する地域の保存会に任された。S商の事務局は前年の事務局の援助を受けながら全体企画の運営に専念した。

一方、Eたち軽音部は練習やライブ発表など活動場所の拡大を模索していた。そこに99秋のステージ発表の打診が、99夏で同じ班だったAやN氏からあり、同じバンドのF, Gとともに参加することを決めた。このとき、実行委員会にE, F, G, Jも出席していた。

99秋の反省を踏まえ、自分たちのオリジナルの企画をつくりたいA～Cはこれまで部分的に参加していた校内の女子サッカー部、軽音部の生徒F, Gを巻き込み自分たちで「札幌・春の広場」の復活を画策する。このころから、校内の実行委員A～Gの日常的な交流が進む。しかし、参加者（高等ろうなど）がそろわないのと、先生方の許可がもらえず校内施設を借りられずに断念するに至る。

「春の広場」復活が失敗に終わった後も、S商の実行委員が00夏の企画を練るも時間がなく長年参加していた常連校の不参加が相次ぎ、釧路実行委員会（1999年11月発足）が同時期に企画していた「夢の学校2000」に参加することになった。7月にS商、釧路地区合同実行委員会を持った（帯広）。00夏にS商からはA, B, C, E, Fのほか、Dが初参加した。また、空知地区からIなど2名参加した。

00夏（釧路）では、S商が経験者であることから自主的に班長になって参加者の緊張をほぐし、雰囲気盛り上げた。この参加を通じて、企画づくりのアイディアが広がり、S商内の実行委員同志の交流、連帯が進んだ。

表5 高校生の広場、近年の取り組み

年 月	企 画 名	概 要
1998 11	98 秋の広場	参加 30 校 108 名。 分散会：生徒会，平和，手話，太鼓，よさこい，ダンス 全体会：高校生文化フェス，ビッグアート，大交流集会
1999 8	99 夏の集い	砂川。参加 3 校 40 名。 青空セミナー（よさこい），成果発表会，連風あげ。 S 商サッカー同好会が合宿をかねて（有志）参加。
	11 99 秋の広場	参加 27 校 120 名。 分散会：生徒会，平和，手話，ダンス，よさこい，太鼓 全体会：高校生文化フェス（バンド），ビッグアート，大交流集会 平和分散会参加者が北海道平和ゼミナールを発足
2000 1	全道高校生 生徒会交流会	99 秋の生徒会分散会をきっかけに 3 校から 50 名あまりが参加。
2000 5	00 春の広場	H 高等ろう学校との交流や広場規約紹介などを企画し，4 年ぶりの開催を模索するものの 会場校（S 商）の使用許可が下りず中止に。
	8 夢の学校 ～2000 夏～	白糠町。参加 5 校 42 名（札幌・釧路地区）。 講座「白糠町の歴史」，討論会「高校とは何か？」 選択授業（お菓子，ペットボトル，川釣り，ロウソク・行灯，廃線探索，軽スポーツ） ウォークラリー，「思ひ出コロコロ」 初の地方実行委員会（釧路地区）単独の開催。自作のテーマソング「明日の夢」の反響大。
	9 9.24 教育道民大集会 ビックウェーブ 2000	札幌，真駒内アリーナ。第 1 部の子どもたちによるアトラクションに群読・ゴスペルを披露（札幌，釧路の高校生約 100 人）。
	11 00 秋の広場	参加 25 校 140 名。 分散会：生徒会，平和，手話，よさこい，料理，おもしろ実験 全体会：高校生文化フェス（ゴスペル，よさこい発表）しゃべり場，大交流集会 討論形式の企画が復活。文化フェスに S 商ゴスペル同好会が参加。

表6 1999 年～2000 年の「広場」，S 商内の自主活動の展開概要

時期	「広場」	校内（S 商）	
	事務局（S 商）	軽音部	女子サッカー同好会
99 夏	初参加	活動場所拡大を模索	合宿練習として「広場」に有志参加
99 秋	主催（初の運営経験）	ライブ発表で「広場」に参加	（同好会として承認）
2000.5	「春の広場」復活模索	ゴスペル愛好会	
00 夏	釧路実行委員会主催 「夢の学校」に参加	学校祭クラス発表のゴスペル中心メンバーと愛好会結成 T 高生徒有志と合流し練習	
9.24 *	ゴスペル，群読に参加	札幌ゴスペル合唱団として発表	
00 秋	主催（事務局引き継ぎ）		00 秋にステージ発表で参加
2001.2			北の舞台芸術祭で発表（地域のゴスペル合唱団 H S と交流）
2001.3			予餞会，国際婦人デー集会で発表 （卒業後も活動継続）

*9.24 教育運動大集会

2000年6月に決まった「9.24教育運動道民大集会」において、第1部を「広場」実行委員会に任せたいという打診が自主活動検討委員会委員長でもある集会事務局のO先生からN氏にあった。この話を聞いたS商の実行委員は、Gの「みんなで楽しい合唱がしたい」という意見からゴスペルを発表することで一致した。ちょうど、学校祭でゴスペルを披露していたクラスのリーダーHに声をかけ、校内では「ゴスペル愛好会」を結成し、メンバー集めに校内を奔走。校内ではクラス、部活の枠を超え、3年生を中心に40名以上が参加した。また、校外では札幌ゴスペル合唱団として活動、T高から参加があった。当日には釧路実行委員会(20名)との共演も実現し、100名近くのコスペル合唱になった。ゴスペル隊にはA、B、C、D、F、G、Hが参加し、学校や大人たちへ自分たちのメッセージを形にした群読の一部も担当した。

00秋では、S商「広場」実行委員が全体会を企画し、前年と違った独自性を持った企画で参加者同士の交流が進展する。会場の都合でできなかったビッグアートの代わりに、00夏を参考に「しゃべり場」を10人くらいの班を単位に行う。班内で話しやすい雰囲気をつくるため、自己紹介の時間を取り、一人ひとりが参加できるゲームの時間を事前に行った。班交流の時間には高等ろう生が参加できるように発言者は手を上げてから話すなど配慮がされていた。分散会も、近年にはなかったおもしろ実験や料理の分散会が増えた。A～G、I～Kは実行委員 Hはゴスペル発表のみで参加した。その後、引継ぎでIが次期実行委員長に内定する。

S商ゴスペル愛好会は00秋の発表時には15名まで減ったものの、B、F、Hを中心に、校内で活動を続けた。「北の文化芸術祭」(2001年2月)の出演の際、地域サークルHS、専門家との交流の経験が「ゴスペル」理解をめぐる葛藤をうむ。しかし、愛好会メンバーの話し合いを重ね、ゴスペルを歌う自分たちの価値を見出した。卒業して大半が就職した現在もS商「広場」実行委員会出身ではB、F、Hが、他に9名が地域青年サークルとして活動を続けている。

2) 顧問N氏

S商では3年HR担任、倫理担当、生徒会顧問のほか、女子サッカー同好会(1999～)、ゴスペル愛好会(2000～)顧問もつとめている。「広場」では、S商に赴任してしばらくたった99夏から自分の担当授業(倫理)を通して夏の広場のチラシをプリントの裏に刷って配布している。00夏は実行委員の生徒に口コミで知らせた。「秋」には、夏の参加者、生徒会などに口コミで個別に呼びかけている。初参加の後には、実行委員会(月1回)への参加を口コミで個別に呼びかけている。

実行委員会では、近年(主に前年)の取り組みを紹介し企画、運営の参考にさせている。細かいアドバイスは、実行委員のOB・OGが関わっている。近年の「秋」の分散会担当や夏のサポートなどの組織(他校、OB・OGなどの渉外)については氏が請け負っている。99秋の平和分散会ではS高(胆振管内)のI先生経由で1999年の原水禁世界大会に参加した高校生、青年たちが運営担当として組織されている。

9.24教育大運動集会では第1部(子どもたちのアトラクション)を組織(S商実行委員などゴスペル・群読要員として、OB・OGを裏方として)。ゴスペル、演劇の指導者を紹介、実技指導してもらっている。

3 個人の実践過程と意識変化（表7参照）

1) Aの場合

Aは2年からN氏が倫理の授業をもったので、99夏をプリントで知る。秋のことはまったく知らされていなかったもので、この頃の「広場」のイメージは「道内の他校の高校生といっしょにキャンプをする」イベントだと思っていたようだ。普段クラスで一緒に友人以外と付き合うのには勇気が必要であったが、一緒にいるクラスの友人と参加できた。

99夏の実行委員会には参加が決まった時点でN氏に誘われているので出席していた。そこで、「広場」が高校生の手によって企画されていたことを始めて知った。しかし、その場にいた現役高校生は前年事務局の札幌S高3年の2人と自分たちしかいないこともわかる。実際参加してみて高等ろう学校の生徒との交流が印象に残る。始めはどう接すればいいか戸惑っていたようだが、実際話してみるうちに自分たちと同じ高校生が考えるようなことを考えていることがわかった。そこで、耳の聞こえない人たちがひとりの人間として、高校生として出会うことができた。これをきっかけに、新しい価値観と出会い、公的な交流から私的な交流へ転化する「広場」的交流を体験する。その後は、一緒に参加したS商の友人数人と高等ろうの学校祭を見学し、太鼓などの表現活動に打ち込む純粋さに感動した。これらの経験で、より手話に興味を持ち耳の聞こえない人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった。

99夏に参加して体験した新しい価値観に出会い、視野が広がる楽しさがある「広場」的交流を広めたいという思いと、まだ参加したことのない企画を自分たちが中心になって運営しなくてはならない不安が交錯しながら実行委員長を引き受けている。前年事務局の札幌S高3年の2人は就職活動などでOGとしてAたちをサポートした。S商の新事務局は実質ビッグアートなど全体会の企画、運営と受付事務のみであったが、「秋」初参加のAは企画の構想が浮かばないまま、去年までの企画内容を踏襲するのが精一杯であった。参加者には楽しんでもらえた手ごたえはあったものの、OBからの指摘で事務局自体が高校生の手による「広場」にできなかったことへの反省が残った。

99秋の反省をもとに、自分たちで作る「広場」を企画しようと模索を始める。これまで事務局メンバーだったA～C以外にも、99秋にバンド参加していたE～Gにも声をかける。昼食は料理を一緒に作ることで参加したみんなで楽しめたり、高等ろう生との交流をひろめるために高等ろう生主催の手話講座を設定するなど考えた。しかし、企画のほうは校長の反対や高等ろう生とのスケジュールが調整できずに中止に追い込まれる。校長の言い分は「(公認部活動の大会でもないのに)他校生がうちの学校に入るイベントでうちの学校を使うのは望ましくない」という内規に縛られたもので態度も一方的であった。このため、私たちの願いを共有できればという思いが「校長先生も参加したらいいのに」というコメントにもつながっている。この時期の話し合いによって、これに参加したメンバーはクラスが異なり、普段とは違う交友関係が校内にできつつあったので、ここで生まれつつあった連帯が00秋につながったと振り返っている。

00夏も自主企画を望んでいたが、「春の広場」でもめたため企画する時間がなくなって断念した。釧路の実行委員会の「夢の学校」の参加の前に、N先生の誘いで帯広の釧路・札幌合同実行委員会に参加した。ここで、釧路の実行委員の「夢の学校」というキーワードだけで話し合

表7 A, B, F, Gの意識変化

	B	F
初参加の動機	1年のときから(N先生から配られた)プリントで夏のキャンプのことは知っていた。その時はキャンプには行きたかったけど、他の友人が行きたがらなくて参加しなかった。2年のときも同じようにクラスの友人を誘ってCさんが一緒に行ってくれると言うので参加した。(他の学校の)同年代の友人ができたり、(噂に聞いて)カヌーに乗れることを期待していた。	授業で配られたプリントで(99夏)を知った。キャンプがしたかったので楽しそうだなと思った。同じ軽音部のメンバーがサッカー同好会で(有志)参加することを知って、一緒に参加しようと思った。
初参加後	同じ班の高等ろうの人と接して視野が広がり、もっと関わりたいと思った。同じ学校のAさんたちとも2日目に仲良くなった。(一緒に参加した)高等ろうと接して、先生の話も聞けて、(私たちが)間違っていることや先入観に気づいて偏見がなくなった。	(99夏では)他の学校の人より、サッカー同好会の人と話してばかりいた。炊事のときに同じ班の他校の人と話した。
動機 99秋 実行委員になった	A, Cさんたちと(99夏の)事後アンケートに「実行委員になりたい」と回答したら(実行委員会に)呼ばれた。(99秋のことは)その後の実行委員会で初めて知った。委員長(事務局)はS商だったけど、先輩たち(S高・98年の事務局)に頼りっぱなしで、自分たちが何をしたいのかわからないうちに終わってしまった。企画内容も(N)先生の指示で「こんな感じになる」ということをやっただけで、参加者には楽しんでもらえたようだけど、「ばつとしない」とOBに言われて悩んだ。	軽音部でなかなか活動の場がなく、何のために練習しているのかわからなくなり、目標がないとただだらしてしまっていた。同じバンドのEさんたちから(99秋)で発表しないかと誘われた。校内では練習すらままならない状況だったが、外でライブする機会ができてやる気が出た。後輩にも続けて場慣れしてほしいと思った。
復活を模索 「春の広場」	(99秋の反省から)「春の広場」を自分たちの手でやりたいと思った。そこで、広場規約を紹介したいと思った。(校長先生が校舎使用を許可してくれなかったのは)残念だった。	(99秋以降)Eさんと一緒に行動しているうちにいつのまにか実行委員になっていた。企画など細かいところにも関わるようになった。話し合いは真剣で、AさんBさんがフォローしてくれた。
00夏	討論会という話せる場があって、いろいろな考えの人がいることを感じた。「秋」の企画のオリジナルのアイディアが(事務局だけでは)なかなか思い浮かばなかっただけに、釧路の実行委員会がつりなどの選択授業やウォークラリーなど初めてなのになにいろと考えていることにショックを受けた。	(釧路の)個性的な面白い高校生と友達になれた。
9.24 (教育大運動集会)	「(9.24に)合唱をしたい」という話になって、学校祭で3年生にゴスペルが上手だったクラスを中心メンバーをさそって、「ゴスペル愛好会」を校内でつくった。ロコミで参加者を集めた。また、Fさんや組合の先生の手ついでT高の人も参加してくれた。寄せ集めの50人をまとめるのは大変だった。歌を覚えていなくてもステージに立ちたい人がいたりなどトラブルは絶えなかった。校内でクラスの外のかわかりができた。(9.24が終わっても)00秋や予餞会、ゴスペルのイベント(北の文化芸術祭)に呼ばれてはりきっていた。(この取り組みで)大事なものが得られたような気がして、卒業後も歌えたらと思っていた。	学校祭のクラス発表でゴスペルがあって楽しく歌う感じでインパクトがあった。歌うことでみんなと何かいっしょにやっている一体感があった。クラスの友人も参加してくれた。そこでできた友達と(9.24のあとも)卒業前なので何か一緒にやりたいと思った。2月には厚生年金で本格的なゴスペル合唱団の人と一緒にステージに立てることになった。
00秋	(全体会では)去年のように漠然とゲームをするのではなく、(釧路のような)「しゃべり場」みたいなことをしたいと思った。(00夏で)仲良くなった釧路の実行委員長と秋の企画について話したりした。	(00秋では)バンドやゴスペルに加えて実行委員の役割も持って大変だったけど、充実したい経験になった。実行委員になって、何かやらなくてはという責任感と(言ったことが受け入れられるという)安心感があった。

	B	F
ゴスペル活動本格化 (地域公演参加など)	(プロの指導者や地域のゴスペル合唱団との交流で)普通の合唱と歌い方がかなり違うことをはじめて知った。これをきっかけに HS (地域のゴスペル合唱団) にあこがれて愛好会のメンバーの友達と「入ろうか」と話していた。指導者の方もいい人だった。	(9.24 は)「みんなで集まってアリーナで歌いたい」という人が多く集まったが、「本格的(続ける)ならいい」とおりる人が「広場」の実行委員でもいてショックだった。 中学時代合唱部だったHさんが技術的なリーダーである。彼女のおかげで歌えるようになった。バンドでもキーボードにしがみついてコーラスをいやがっていた。合唱は好きだったけど、(愛好会では)伴奏役に徹しつづけていたので、打ち合わせの輪に入れず寂しい思いもした。Hさんに言われるままに歌ううちに楽しさがわかってきた。と同時に、自分の位置「ピアノ係」で保っていたのが、からを打ち破ったことでいるだけでみとめられている実感が得られた。 「天使にラヴソングを」から(ゴスペルは)ただ楽しいイメージしかなかった。(地域のゴスペル合唱団の方々が)技術的なことだけでなく、聖書についての話も聞いて(自分たちがやってきたこととの)違いがわかってきた。これをきっかけに、私たちのいままでの(ゴスペルに対する)態度は失礼ではなかったのかと思い始めた。
卒業前	「ゴスペル」の印象が大きく変わってから、活動を続けるかで愛好会で話し合いを続けたが、結論は出なかった。3月の打ち上げの時にK先生(「広場」顧問団長)が、「続けたら」と言ってくれて迷いが吹き飛んだ。HSに入ろうとも思ったが、プロになりたいとは思っていなかった。それより(愛好会の)みんなと一緒にいるのが楽しいし、ここまで一緒に続けてきたのだからもう少し続けてみようと思った。	愛好会を続けるかどうかについてメンバーで話し合いを続けたが、ゴスペルの宗教性に違和感を感じている人もいた。私も「ゴスペルやってる」と胸はって言えるか悩んだ。でも、他の(地域の)団体もただ楽しくて信仰心と関係なく歌っている人もいて、(信仰の厚い人とも)うまくいっているのがHSだった。むしろ、今(愛好会で)一緒にいる仲間とばらばらになるのが嫌だった。他のジャンルでもいいから(愛好会のメンバーと)活動を続けたかった。このことは、自分の問題であると同時にみんなの問題であった。
始動後 地域サークル	卒業してからみんな忙しい中、役割を一人ひとりが担ってメンバーのやる気が出てきたと思う。	S商の自分たちの代は、友人も楽しく面白いことも多かったので、ゴスペルが続いて、楽しいことが続いてもよかった。楽しいことも本気で打ち込むことが両方あることが楽しい。卒業後は、みんな会社のグチ話で練習にならなかったが、一緒にいるとホッとする。
自主活動に関わって得られたこと	校内だと人間関係が固定されて、それまでにできた友人にとらわれていた。「広場」は行きたい人が集まっている場なので、自分から積極的に話せた。人と関わるのが刺激になる。変わった人が集まっているから発見がある。北星余市高と接して価値観も違った。「広場」は自分を発見し変え、成長できる場だった。行動力や先を読む企画力がついて別のイベントを作っているときに先生にほめられた。 (「広場」, ゴスペル愛好会の活動を通じて)言いたいこと、自分の気持ちと言えるようになった。お互いの気持ちが分かることで信頼関係が築ける。一線引いたような友人関係は嫌だなど、「広場」の活動をしながら思うようになった。	高校生活や(高校時代の)クラスには満足している。(「広場」で)普段から一緒にいる人じゃなくても仲良くなれて、他のクラスとのつながりが出てきて学校が楽しくなった。ゴスペルなどで忙しいがそれが好きだ。 「キャンプしたい」という気持ちから人脈を伝って広がって規模が大きくなっていくところに自分がいるのはすごいと思う。 中学の時は男子と話せず、噂や悪口ばかりの女子の輪にも入れなかった。中学3年の頃「一緒に〇〇高校行こうね」と話しかけられるのは嫌だった。高卒就職希望で、中学の人がいなそうな高校を選んでS商になった。S商はこい(個性的な)人が多く、めざす仕事があったりで、夢などを語り合えるのも面白い。(「広場」で異性との)出会いも期待したが、ほとんど女子ばかりの場でも楽しくて、いろいろな場で友達をつくらうと思った。親しくなった人とのつながりを大切にしたいと思える。 ゴスペル愛好会では、一つの役割に固執せず自分からかわかることで、一緒にいたい気持ちに素直になれることに気づいた。

	A	G
初参加の動機	2年になって、N先生から(授業で)夏のキャンプ(「夏の広場」)のことを知って、友達と「面白そうだね」と一緒に参加した。	(軽音部の)同じバンドのメンバーが夏(99夏)に行っていて(99秋でバンド演奏を発表しないかと)誘われた。夏のことはN先生から(授業で)もらったプリントで知っていて「いいなあ」と思っていた。誘われていろいろな高校から来てふれあう場所で、(いろいろな高校から来ている人たちの前で)演奏してみたいと思い、実行委員会にも参加した。
初参加後	(99夏に参加して)知らない人の中で2泊3日普段とは違う自然の中で、体験することも交流する相手も初めてのことがたくさんあって思い出に残った。準備の会議にも出席した。それまでは、(高校生の)実行委員がいることは知らなくて先生方が企画しているのかと思っていた。準備でしおりなどをつくっているのを見て、(学校)行事とは違うんだと思った。高等ろうの人達に会って一緒にキャンプして、今まで耳の聞こえない人達に対して持っていた印象が変わった。(始めのうちはどう接すればいいか)考えすぎていた。考えていることも(他の高校生と)一緒だった。何人かと仲良くなって学校祭行ったが、太鼓などで(健常者より)頑張っている姿が印象的だった。(高等ろうとの交流で)視野が広がり、手話にも興味を持った。	日常では味わえない体験、いつも(の学校などで)なら冷めていてできないこと、歌ったり、踊ったり、手話など、みんなでできないことをできて楽しかった。
実行委員になった動機、99秋	(99夏が終わって)実行委員会に出席している人が(S商の)4人しかいなくて、ここで(役割を)分担するしかないと思って「委員長やろうかな」と言った。しかし、秋には参加したことがなく、どういうものか全然わからなかった。結局、去年(98秋)のしおりなどの資料をもとにして企画を立てた。(98秋の事務局だった)札幌S高の2人が助けてくれた。この時は、自分たちでやろうと思ったことができなかった。(秋の広場の)企画全てにまで構想を立てることができなかった。OBから(企画内容が)マンネリ化しているということを指摘されて責任を感じた。	(99秋初参加↑)
「春の広場」復活を模索	2000年に入って、今年は(自分たちの)やりたいことを「広場」で実現させようと思った。その手始めに「春の広場」を復活させようと思った。この「春の広場」では(秋のような)分散会の他にみんなで料理をしながら昼食をとることや高等ろうの人達に手話を教えてもらうなど考えた。参加したみんなで企画から楽しめるものにしたかった。春休み頃から昼休みなどの空き時間を使って話し合いをした。しかし、しおりの原本までできていながら校長先生が他校の生徒が入るのを渋ったらしく、会場を確保できなかった。(N先生に呼ばれてそのことを知り)ショックだった。せっかく自分たちに企画したのに、「(「広場」を)やったら成功(実施するだけで皆の思い出に残る)」するのと思った。ただ、この経験は秋につながったと思う。校長先生も参加したら(「広場」の)楽しみを共有できたのに。	(00春の企画づくりを通して)学校や大人は表面ばかり見すぎて、(私たちを)人として理解しようとして来ない。(会場使用についても)一方的で、もっと話し合ってくればいいのに。むしろ、ルールや決まりに縛られている大人たちに「広場」を見てほしい。私たちも(「広場」で)部活の先輩と後輩の関係など変わったことがあるのに。
00夏	帯広(の合同打ち合わせで)会った時、(釧路実行委員が)みんなしっかりしていて、私たちは遊び感覚でやっていたのに驚いた。キャンプ(00夏)の内容聞いて、私たちは前年の資料に頼ってしまったのに、新しいことばかりで参加しても楽しかった。班も寝る部屋もみな違う学校の人で不安はあったけど、仲良くなれた。ウォークラリーなど班内で協力して動いて考えるものとか、討論会もよかった。初日の不安は他の学校の参加者や(初めて企画する)釧路の実行委員も同じみたいで、私たちは班長になって助けようと頑張った。	(不参加)

	A	G
9.24 (教育大運動集会)		(「広場」, ゴスペルの活動に追われてクラスになじめなくなり) つらかった。いままで仲良かった人とも今までのように話せなくなった。ゴスペルも楽しいので行きたいし, クラスの友達とも話したいけど(ゴスペルを優先しているうちに) 両立はできないと思った。でも, 自分が思っていただけの部分もあり, クラスの中の友達に「一人になりたい」と悩みを打ち明けると「(一緒に) いてほしい」と言われて, 他の友達も入って泣きながらお互いの思いに気づけなかったことを語り合った。(9.24は) テーマソングではなくてみんなで楽しく歌いたいと思った。ゴスペルがそのイメージにあった。
00 秋	秋では(分散会に) よさこいをやっているが, 今年はおBOGも含めて教えられる人が来なくて中止しようかと思った。でも, 動くのもあった方がいいと話合っ(て, (私たちが) 学祭でやったことを教えてみよう(Gさんと) 話した。	私たちのクラスで学祭によさこいをするのは伝統であった。去年の先輩の見てかっよかったので, 今年もやってみようと思った。クラスのりのいい人達と話しているうちに盛り上がり一緒に中心になって実現した。大学チームの人達に助けてもらった(はっぴ貸出, 技術指導など)。(分散会で教えてみて) 他の参加者より高等ろうの人達が一生懸命で, 身振りや表情が純粹で印象に残った。(みんなが) 覚えていく様子を見て自分も伝わるものがあって楽しかった。 (釧路のを教訓に) 討論会が盛り上がるように, その前にゲームをしようと思った。昔ながらの障害物競走みたいなものをイメージした。すすめ方も実行委員に頼らない形で, (ゲーム・討論会の) 班長をくじで決めたのだが, (班長にあたった参加者が) 率先して自分をアピールするなど(場を盛り上げてくれて) よかった。分散会でもみんなで作って盛り上がる料理や(普段の) 高校生活では経験できないおもしろ(化学) 実験も実現できてよかった。
ゴスペル活動本格化	(不参加)	(ゴスペルにも) また, 新しい人が入ってきている。(宣伝がわりに) 廊下で歌っていたら, いろいろな人が見に来てくれた。(実際に発表して) 自分達がこんなにうまいと思わなかった。みんなにも参加してほしい。後輩が一人しかいない。他の先生方の考え方も変わっている。かっこうややっていることもまちがっていないから, (ゴスペルに打ちこむ) 「高校生らしさ」を認め始めているようだ。
得られたこと 自主活動に関わって	(「広場」にある) 「夢の学校」ではいやなことを忘れられる。(99 夏から) 多くの東商生が参加したけど自分が続けたいと思った人が残った。(バイトやクラスの友人関係を気にして) 残れなかった人は(「広場」の) 楽しさを知らない。興味があっても勇気を持って一步を踏み出せなかったのだと思う。	ただ一緒にいるだけだと(他の人が) 何を考えているのかわからない。(「広場」の人達の) 意見いろいろ聞けて, 自分より辛い人とも接するときに心の余裕ができた。2年のときクラスが盛り上がらないのを見て, それでいいか, と思っていた。(「広場」に) 参加して3年になると今を楽しまなければ損, 楽しんだ分だけ思い出に残ることに気づいた。クラスの人達にも教えたい。ぶつかることをさけるのではなく, 言いたいことを言っ(て, やりたいことをやって, たまにはぶつかったっていいじゃん, と今は思える。

いを繰り返しながら自分たちの企画をテーマソングまで手作りで行っている姿に触れる。実際の企画もいままで自分が持っていた「交流」の概念を大きく超えて、普段では話し合うことのない校則などについて、高校生や先生を交えて率直な意見を言い合ったり、ゲームも大変だけど班の共同作業で行うもので発見が多かった。しかし、釧路地区による「夏」開催は実行委員も含めて初めての体験であり、他校との大規模な交流も初めてという不安があることに気づいたAは、同じ不安を抱えながらも一回参加して雰囲気を知っている自分たちが場を率先して盛り上げようと他のS商の参加者にも呼びかけ、班長の役割を担っている。そこで、自分たちから積極的に声をかけることの大事さを実感する。

00 秋では、全体企画のほかに同じクラスのGとよさこい分散会を担当している。はじめは、去年まで担当していたOGが参加できないので中止にしようと思っていたが、「(分散会には)動くのもあったほうがいい」と自己表現の分散会を残そうというGの提案を受けて自分たちが学校祭のクラスで踊った踊りを高等ろう生を中心とする分散会参加者に教えた。

「広場」を通じて、自分のクラスの交友関係の枠を越えて広場の取り組みに踏み出すことによっていままでの学校ではできない交流や表現活動を実現できる楽しさを実感している。

2) Bの場合

初参加は99 夏に授業で配られたプリントを見たことがきっかけで、一緒に行けるクラスの友人在りすることで参加に踏み切っている。以前の「夏」のことを知っているのも、他校の高校生と一緒にキャンプができるだけでなく、カヌーなどさまざまなアウトドア体験ができると思っていたようだ。

99 夏の参加で、Aと同様に高等ろう生との交流が印象に残っている。それに加えて同じ学校でも普段接することのない違うクラスのAたちとの交流も今後、「広場」に関わる上で大きな転機になっている。

99 夏に仲良くなった同じ学校のA、同じクラスで一緒に参加したCと事務局を担うことを決意した。先生や去年の事務局のアドバイスに言われるがままに、99 秋の運営に関わった。しかし、参加者としてもあまり(他の参加者と)交流できず、実行委員としても「広場」で何を実現したかったか目的意識がなく終わったことへ反省が大きかった。

今度は自分たちの作った「広場」にしたいという思いが、N先生の話のきっかけに「春の広場」の復活を目標に立てる。この目標はA、Cとすぐに共有された。「春の広場」では自分が実感した「広場」的交流や自分たちで企画する所以に気づかせてくれた広場規約⁽¹⁵⁾を参加者にも知ってほしいと思っていた。

00 夏に参加して、校則などについて班内のいろいろな学校の高校生や先生と率直な意見を交換できる討論会の企画に、いままではなかった交流の形態を知る。そこでは、いままでの交流よりも確かに高校生や先生の多様な価値観を知る。

9.24 のゴスペルの取り組みでは、ゴスペル愛好会の参加者組織の中心となって呼びかける。ゴスペルを歌いたい、アリーナのステージに立つという一生に一度の経験をしたいという思いは同じでも考え方や価値観の違う人たちと一緒に活動する大変さを実感する。しかし、一参加者としても参加できて楽しめ、校内でもクラス以外の異質な人たちとの交友関係ができた体験はかけがえのないものになっていた。ここで、協同して自分たちの思いを表現することの醍醐

味を実感している。

00 秋では 00 夏で得た新たな交流の形態を取り入れようと試みる。しかし、ただ模倣するだけでなく、00 夏の問題点などについて釧路の実行委員長たちと情報交換している。00 秋は新たな出会いのほかに、00 夏で出会った交流をさらに深める意味もあったと振り返っている。

ゴスペルの活動が本格化し、地域のごospelサークルにあこがれて入団を希望するようになる。しかし、愛好会を続けるかどうかの話し合いから、一緒にいるメンバーと歌いたい自分の要求を再確認した。卒業までは連絡係など部長のような役割を一手に担ってきたが、役割を分担することを呼びかけてメンバー一人ひとりが運営に参加するようになっていった。

「広場」の取り組みを通じて、クラスの狭い交友関係に縛られては得られなかった、自分の思いを持った人たちとの価値観の交流によって自分が大きく変わっている。特に、自分の思いを積極的に発信して、形にして実現させる力が非常に伸びている。ゴスペル愛好会の取り組みで、お互いの気持ちを交わして信頼関係を築くことでともに自己実現できる場をつくりあげている。

3) F の場合

初参加の動機はキャンプに興味を持ったが校内の親しい友人と一緒に参加できることで参加に踏み切っている。しかし、友人がサッカー同好会だったので、サッカー同好会の人と交流の機会が増える。しかし、炊事は班行動なので班内の他校の人との交流も若干体験できた。

軽音部の活動場所がないという問題意識は同じバンドの E と同じように持っていた。自分の表現活動にも目標がほしかったため、99 秋のバンド発表の打診を受ける気持ちになる。他校の同じ高校生に発表できる機会も少ないし、ライブも楽しめたことで後輩にも勧めたいという気持ちを持っている。

99 秋以降に同じ学校の事務局の A～C たちと実行委員として「春の広場」の企画作りなどに関わるようになる。A～C たちの自分たちの企画を作ろうとする、真剣な姿勢が印象に残っていたようである。

実行委員を始めた頃は、今までやっていた人についていくという感じであったが、ゴスペル愛好会結成を機に積極的に関わるようになった。学校祭のゴスペル発表をみて、バンドなど自分が経験した表現とは違う形態で、かつ一体感を楽しめることで魅力を感じた。愛好会では参加組織の中心になり、校内外に新しい交流ができた。また次の発表機会も得られたので引き続き積極的に関わりたいと思っているようだ。

00 夏に参加。00 秋には事務局の全体会の企画・運営にも積極的に関わった。愛好会の練習と事務局の活動が毎日続いて大変だったが、充実していたようだ。

ゴスペル愛好会の活動の舞台が地域に広がって、地域のごospelサークルとの出会いは自らの「ゴスペル」の理解をみなおし、愛好会そのもののコンセプト（存在意義）をメンバーに積極的に問うた。自分も愛好会としてもゴスペルを続けるかどうかの結論は出なかったが、今のメンバーで歌い続けたいという愛好会の存在意義をメンバーで共有することができた。卒業後も一緒に歌うだけでなく、何でも話せるホッとする場になっていることが嬉しいと思っている。

かつては、中学時代にいじめにあうなど、自分の気持ちが話せなかった。「広場」の取り組みを通じて、一つの思いを発信する（「広場」に参加する）ことから様々な交流が発展し、自分の

要求が広がり、また新たな出会いと共に実現していくことで自己実現の範囲が広がっていることを実感している。ゴスペル愛好会では、苦手だったことに自信がついたり、それを支えてくれた、見守ってくれた仲間への信頼感を得、それを守るために自ら積極的に思いを伝え、受け取っていくことを実践している。

4) Gの場合

99 夏は知っていたが参加せず、同じバンドの E の呼びかけで 99 秋にバンド演奏で参加している。A と同じクラスということもあり、実行委員会にも出てバンド発表以外の日程にも参加していたようだ。

99 秋に参加して、普段ならできない多くの表現活動がみんなで実現できる点で「広場」の魅力を実感した。

99 秋の後は、A～C とともに実行委員として活動する。「春の広場」の中止に関して、校内の先生方の自分たちに対する接し方への不満がより意識化された。「広場」によって一人の心をもった人間として接することの大切さを先生方にも実感してほしいと願うようになっている。

一人ひとり固有の価値観を持った人としての交流も追求するようになったが、最初によかった壁は自らの身近なクラスの友人との付き合い方であった。普段一緒にいることで仲がよかったことを実感していたのだが、「広場」の実行委員活動が日常の学校生活へ侵食するにつれクラスの友人と疎遠になる。そのため、クラスの友人関係を解消しようとするが、そこで自分の気持ちを打ち明けることでクラスの友人との交流の質を深めることができた。それは、一見同じように見える人でもそれぞれ固有の価値観を持っている人としてお互いの価値観や要求を交流することで始めておたがいをひとりの人として認め合えるということであった。こうして、「広場」的交流を身近なクラスの友人関係に広げることになった。9.24 ではよりみんなが楽しめる表現方法として、学校の合唱とは違って自分たちにとってのびのびと楽しい合唱をと提案し、ゴスペル愛好会のきっかけをつくる。

00 秋では、昨年まで担当していた OG がいなくなって存続の危機にあったよさこい分散会担当などを担う。そこでは、学校祭のクラス発表の踊りを教えることになった。クラス発表でも中心になっていた踊りを、高等ろうの参加者が一心に覚えていく姿をみて表現の世界の交流を実感する。この後、分散会の参加者で高等ろうの踊りを覚え、全体会の分散会発表では両方の踊りをともに披露することになった。全体会の企画でも、討論会の前にはじめて会った人どうしが話しやすいように工夫されたゲームを企画しようと関わる。ゴスペル愛好会には、00 秋の発表の後も 2001 年 2 月の発表に向けてメンバーを集めながらの練習に積極的に参加している。最近では、廊下で歌いながら歩いたり、ゲリラ的に廊下で練習して意図的に他の生徒や先生に聞いてもらうようにしているうちに、先生方で愛好会を認める態度を示すことが増えつつあり、校内にも自らの発信した新しい文化が受け入れられつつあると実感している。

「広場」の取り組みを通じて、参加したり実行委員会で企画に加わることで、高校生や大人一人ひとりと価値観を会話や表現という形で交流しつづけることで、違いを認め合える人間関係の範囲を広げつつある。

4 「広場」実行委員の学習過程

「広場」への関わりの特徴について「みんなに楽しんでもほしい」という思いが強いA, Bに対し, F, Gからは具体的な提案が目立った。もともと外に向けていろいろな人と交流したい要求を持っていたのがA, Bの特徴で, 自分の思いを表現したい要求を持っていたのがF, Gの特徴であることを考えるとこの2つの価値観が交流されていることを示したといえよう。また, F, Gにとって, はじめサッカーや軽音など自分たちの自己実現の場を求めている, 「広場」はその一つでしかなかったが, A, Bと実行委員会の議論を重ねたり00夏に参加し, 自分たちの要求を協同して実現しようという姿勢を身につける。このように, 彼女らは「広場」の実践を通じて, 「自分たちが受身で楽しむ」ことから「まわりとともにつくりあげて楽しむ」ことへ活動の目的を深めていった。A, Bは交流の質を深化させる課題を持ち, F, Gは自己表現の領域を拡大させる課題を持ちながら学習を重ねたといえよう。

F, Gは校内において, 自己表現の拡大を追求する一方で, 交流追求群は私的集団の同質・閉鎖性からの脱却を試みる中で既存の学校実践の限界を実感し克服を目指している。A, Bは, 私的集団から脱却する中で自己要求から関係づくり(ゴスペル愛好会)をやり直している。その過程として, 「広場」と普段の交友関係のバランスで苦しむ(葛藤)時期を経ている。F, Gにも同様の悩みを抱えているが, 自己表現領域の拡大を追求することでゴスペル愛好会などの新たな集団づくりへ進む。

S商ではA, B, F, Gとも同じ「広場」実行委員でありながら異なる課題を持っていたことで, 自己形成への一連の学習過程は異なる。しかし, その解決に向けてお互いの価値観を交流し, 協同することで校内においても自己実現の領域を拡大する実践に至った過程は共通しているといえる。「広場」実行委員は彼女らの(「広場」, 学校への)自立の拠点になり, その価値は「広場」に参加し運営することで「広場」的機能(文化)として得られたといえよう。

これまでから, 「広場」における学習過程は, 運営や企画の製作過程を自分たちのものにする過程であるといえる。そこで, 自分が持っていた潜在的な要求を具体化させ, 自己実現の領域を広げるために連帯することを実感する。その実感が具体化された要求と結びつくほど, 学校などの日常生活における自己実現の領域を拡大しやすくなる。99夏~00秋(S商)の学習過程では, S商の生徒を中心に学校など日常生活と「広場」の活動を行き来する中で自分たちの要求を実現するとともに, 違う要求をもつ生徒同士の相互理解, 協力関係がむすばれているようになっていっているといえよう。これは「広場」を通じてより統一された自己形成をしている可能性が大きいであろう。それは, 言いたいことが言える場の発見, 視野のひろがりから自己の発見と対校内の友人, 先生との葛藤と通じて具体化, 実感された要求の相互理解を通して, 自己実現の領域の拡大に至るのである。

IV 自主活動における高校生の自己形成過程

これらのことから, 自主活動における学習過程を展望してみると, 以下のような過程をへて自己形成を深めていると考えられる。(表8, 図3-1~4参照)

I 体験・実感（非日常的体験・交流を楽しむ）

自主活動について、その形態や現象が日常と異なる内容に興味をひかれたり、そのことや日常では出会えない人との交流を通じて「視野が広がる」楽しさを享受している段階である。A、B、Fの場合は、「広場」への参加理由をキャンプ体験に求め、始めのうちは一緒にきた友人たちと行動をともしながら他校の人との交流をしている。この段階では、活動の「楽しさ」を享受していること、その「楽しさ」が自分たちと同じ層（「広場」：高校生）によって担われていることを知ることで運営にも興味をもつことがある。A、B、FはT先生の直接の呼びかけ

表 8 S 商の自主活動実践による学習過程

	「広場」（非日常）	S 商校内（日常）	
I 体験・実感	99 夏（秋）の参加		
II 形式模倣	99 秋の全体企画		
III 既存価値と葛藤 独自価値の模索	「春の広場」復活の模索 00 夏参加	校舎使用不許可 友人関係の変化	学校価値と葛藤 反学校価値と葛藤 「広場」的価値の模索
IV 要求発信・組織		ゴスペル愛好会結成	「広場」的活動の日常化
V 協同実践	(00 秋企画・運営)	ゴスペル愛好会活動	「広場」的価値の創造

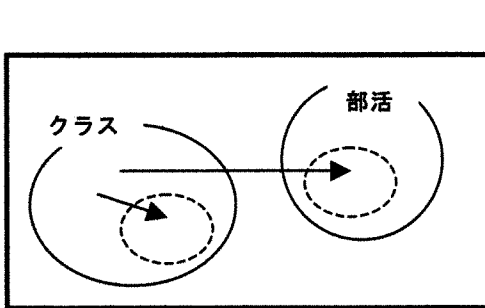


図 3-1 学校生活における私的集団への依存（擬似的な居場所・自己の形成）

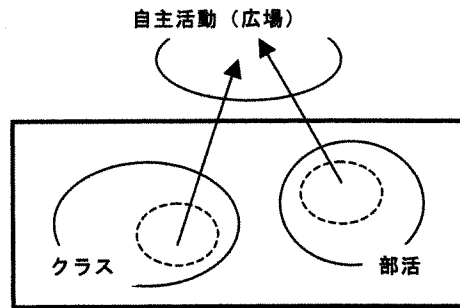


図 3-2 自主活動（非日常的空間）への参加（体験）

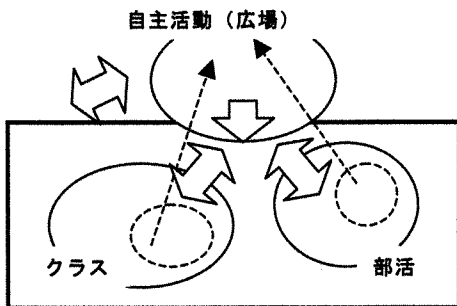


図 3-3 自主活動の日常化と学校や私的集団と対立・葛藤

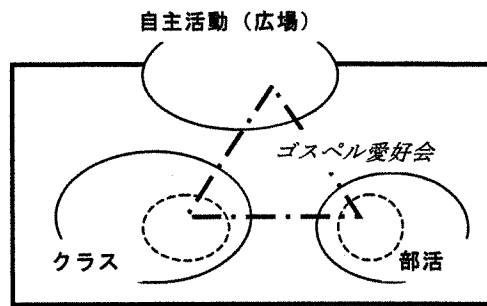


図 3-4 生徒の要求組織と協同実践による自己実現の場の形成（学校や私的集団との葛藤の克服）

を受けて実行委員になった。

II 形式的模倣（居場所的空間を保障しうる枠組みの模倣）

一つの自主活動について参加経験を重ねたり、運営の側に回ると活動の「楽しさ」を生み出すために、これまでの企画を模倣してみようと試みる。これは、自分がその自主活動に参加した本質的要求が自覚されていないのと、参加者の要求と企画化する方法に乏しいことによる。A、Bが初めて運営に参加し、Gが実行委員会に出席していた99秋ではほぼ前年の企画を踏襲している。その後、OBなどの指摘もあり、「広場」の自分たちにとっての意義を模索し表現しようとしているが、「春の広場」企画時でもBが「広場規約」の紹介にこだわるなど模倣段階から抜け出てはいない。Fは2000年度から実行委員の会合に参加し、運営に関わった00秋やゴスペルの取り組みからこの段階にいたと考えられる。

III 葛藤・模索

（活動そのものの価値を模索し葛藤を克服しようとする）

自主活動は非日常の場であることが多いが、その場で自己実現をするためにも活動のそのものの自分にとっての価値を深めないと企画に違和感を持ち続けることになる。A、B、F、GはOBや他の実行委員との議論から、自分にとっての「広場」をオリジナルの企画づくりの議論を重ねる中で模索をしている。その間、他の活動（00夏など）から学ぶことも多くなる。

（活動と学校や友人関係など日常生活の価値の対立による葛藤）

自主活動が活発になり、運営により深く関わると、日常生活（勉学、部活、友人関係）との両立が課題となる。Gに顕著に表れているが、「広場」などの活動が忙しくなるにつれ「群れ」することで維持されていると思っていた日常の（クラス、部活の）友人関係の問いなおしに迫られる。Gは自分の気持ちを打ち明けあう機会を得ることにより両立を維持できている。一方、Aは「広場」でともに活動しているB、Gたちへ日常の友人関係をシフトしている。

また、学校や社会など既存の価値観との対立もある。A、B、Gは「春の広場」について校長が校舎使用を許可しなかったことについて学校の価値観との違いを実感し、顧問のT先生と「先生」の違いを比較し既存の学校的価値観の問題を見出しつつある。

IV 要求発信・組織（活動の価値に根付いた要求の広範な組織）

日常生活における自己形成を疎外する価値観との葛藤を経て、現在の自分が持つ本質的な要求を自覚し、身の回りを組織し始める。A、B、F、Gの場合、ゴスペル愛好会の立ち上げにそれがみられる。それは、他から強いられるのではなく自らの要求から、ただ楽しいだけではない、充実した高校生活を送りたい高校生の要求を広範に組織していることからいえる。すなわち「広場」に対する自己の価値の模索から、従来の学校生活や私的集団の生活を越えた要求の組織へ実践が展開されているのである。

V 協同的实践（実践から自己の活動に対する価値の確信へ）

実際、IVの段階では自主活動の価値が明確になっているわけではなく、より本質的な要求からの活動提起という形で現象する。その実践をIVで組織された者と協同ですすめながらその価

値を共有する過程で自主活動の価値を自己の確信にしていくのである。この結果、「広場」では協同して自分たち独自の企画構成をつくりあげる一方、ゴスペルの取り組みでは「広場」で得た価値観を校内に発信しながら、クラス、学年や部活の枠を越えて協同で新しい文化を創造することで、自己実現領域を校内にも大きく広げることができている。

S商の一連の「広場」の取り組み、校内の自主活動による実行委員の自己形成の過程を図3-1～4にまとめた。初めて「広場」に参加した頃は、クラスなどの日常「群れて」いる友人たち（私的集団）といつも一緒にいることで擬似的な居場所を確保できていた（図3-1）。「広場」に参加し、実行委員になることで普段やりたくてもできないことや新しい出会いに魅力を感じていく（図3-2）。「広場」へかかわりを深めるとともに、普段の学校生活であたりまえのこととしてきた、友人と群れることや、部活やクラスの枠、教師の自分たちに対する理解に疑問を感じ、「広場」実行委員と両立させることが難しくなる（図3-3）。これらの対立をのりこえるのは、クラスの友人を巻き込んで「広場」のように高校生でしかできない思い出づくりを「ゴスペル愛好会」という新たな課外活動を提起することでS商の多くの生徒を組織でき、彼女らと協同することで校内にも自己実現の場を形成する力を得ていったのである（図3-4）。

また、ゴスペル愛好会では「楽しい」合唱のイメージを映画「天使にラブソングを」に出てくるシーンを借りて参加メンバーの共感を得ていた（Ⅱの段階）。しかし、地域のゴスペル合唱団との交流で知ったゴスペルとの自分たちの理解の相違は、自分たちにとっての愛好会の存在意義を脅かした（地域文化の領域に対するⅢの段階）。これに対し、B、Fたちが「広場」で行った議論形態をさらに発展させお互いの思いを率直に交えることを通じ、「楽しい」合唱のイメージ、ひいては愛好会の活動の価値をメンバーの確信にして共有することに成功して現在に至るのである（ⅣからⅤの段階へ）。それは、存在そのものを認め合い、自己実現し合える場を信頼感と安心感を培った愛好会のメンバーとともに作りあげることによってであった。その価値は、卒業後も活動を継続し、講演などで地域住民との交流を深める中で、地域の中に認められ自己実現の領域が地域にも及ぶ可能性があると言える。

おわりに ― 小括 ―

前章までに高校生の自主活動における自己形成への学習過程を明らかにした。これによると、高校生自身が自主活動実践を展開し、自己実現領域を自ら広げられる力をつけることによって、より統一された自己形成の確立へ向かう。そのためには、日常の場の枠を乗り越えたり、横断した領域で、自己の価値観の確立と実現を模索する学習活動が欠かせないと言えるのである。

「北海道高校生の広場」の事例では、異質共同体のお互いの価値観を保障する根底の意識を培う学習がなされていた。異質共同体のお互いの価値観を保障することは、お互いの権利を保障しあうことなど、協同して自己形成を保障しあう場をつくるのに欠かせないことである。「広場」のような非日常の性格が強い自主活動においては、日常の生活実践、学習を客観化、とらわれていた価値観からの解放が比較的容易ではある。ここで得られた自己肯定感、信頼感、安心感を土台に活動の価値の模索をしながら諸関係のくみかえを行う。この結果、自立的価値観の体

得を経て自己実現を可能とさせる次の実践を展開させるのである。すなわち、他の社会(集団)の構成員との相互理解、協同実践から、お互いを尊重しあえる(自我を維持できる)価値を創造する学習に至る。そこから人格再統合、青年期の自己形成が可能になる。すなわち、自分たちの自己実現の場、質、関係を創造する実践に、青年期の自己形成を可能にする教育実践が見出せるであろう。

ところで、「広場」では顧問教師の主なかわりとして居場所の保障、承認してくれる異質的他者との出会いをコーディネートすることが行われていた。具体的には「広場」について授業など日常の接点を利用しての多くの生徒への宣伝、ゴスペル愛好会の地域住民とのつながりづくりの支援である。また、「あなたのやりたいことをやりなさい」というように、「おしつけでなく、後押ししてくれる」かわり方は、学校的価値観を押しつける「教師」ではなく高校生の自己形成の支援者としてであるといえよう。ところが、S商のような学校内外の日常と非日常の自己を統一させるような実践が「広場」とおした活動にはまだ確立されていない。これは、ほとんどの道高教組の教員の目的意識が「行事などの企画のノウハウを学ばせ、他校との(生徒会)交流をする」ことに止まり、生徒会役員のみを参加させていることも一つの理由である。「広場」自体がより異質な高校生同士の集団になるよう、さまざまな要求を持った高校生を「広場」へ参加組織することが「広場」の実践の壁を乗り越える第一歩といえよう。

また、自主活動でつくられた自立の拠点が家庭、地域、学校という青少年の生活の場を貫くような学習に展開できるかどうかについては検討の余地が残る。目の前の人とすらつながれない状況に追い込まれた彼らに内在する要求を実現させる学習は、労働、地域社会、学校の学び、家庭やサブカルチャーに至るまで大人の側からの徹底した縁辺化が進む中でも、自らを疎外した過程を克服し、平和的文化や社会の創造への可能性を生む。このことを、高校生によるさまざまな自主活動実践から、学習の質の違いや参加する高校生(青年)の課題の違いとの関連などについて今後検証を深めていきたい。

注

- (1) 乾彰夫 「戦後青年期」の解体 教育 No.650 2000
- (2) 佐藤学 子どもたちはなぜ「学び」から逃走するのか 世界 No.674 2000 など
- (3) 高校生の自主活動は、子どもの権利条約批准運動を機に生徒会・HR自治中心から大きく転換した。90年代の自主活動傾向を象徴するような代表的事例の整理と意義及び課題については「日高教・高校教育研究委員会ほか 高校生の自主活動と学校参加 1998」にまとめられている。
- (4) 中西新太郎 思春期の危機を生きる子どもたち 2001
 中西新太郎 縁辺化される若者たち 世界 No.674 2000
 中西新太郎 何があっても平気でいようとする心 生活指導 No.558 2000
 竹内常一 子どもの自分くずし、その後 1998
 竹内常一 教育を変える 2000 など
- (5) 門脇厚司 子どもの社会力 1999
- (6) 本節のまとめにあたっては「日高教・高校教育研究委員会ほか 高校生の自主活動と学校参加 1998」のほか、以下の文献を参照した。
 編集委員会 ドキュメント所沢高校(トココウ)学校が楽しい 1998
 広中建次・金子さとみ 学校はだれのものか!? 1999

淡路智典 所沢高校の730日 1999

寺内義和 大きな学力 1996

第14回子育て文化協同全国交流集会報告集 1999

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 「子どもの権利条約」と高校生の自主活動 北海道高教組情報号外 全員討議資料5 1997

第15回子育て文化協同全国交流集会報告集 2000

一人一人の生徒を大切に作る学校を目指して 第38回教育科学研究会全国大会第2分科会報告発表 1999 など

- (7) 「高校生の広場」の取り組みについては以下の資料および顧問団長のN氏(N商→S商教員)への聞き取りをもとにまとめた。

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 高校生の「自主活動」 北海道高教組情報号外 全員討議資料1 1993

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 高校生の「自主活動」 北海道高教組情報号外 全員討議資料2 1994

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 「子どもの権利条約」と高校生の自主活動 北海道高教組情報号外 全員討議資料3 1995

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 生徒会白書 北海道高教組情報号外 全員討議資料4 1996

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 「子どもの権利条約」と高校生の自主活動 北海道高教組情報号外 全員討議資料5 1997

- (8) 各年度の企画名を示すときは 93 夏 のように年度の下2桁を記し括弧なしで表記する。
- (9) 各年度の企画名を示すときは 93 秋 のように(8)と同様の方法で表記する。
- (10) 顧問団の主力教員は、北海道高校教職員組合教文部自主活動検討委員会(自主活)を構成している。自主活は子どもの権利条約の精神を高校への具現化することを目指し、「道内の自主活動実践の掘り起こしやその実践の発展のための理論的検討を進めるとともに、具体的な援助の方向をさぐ」る目的で1991年に設置され、年数回の会合が行われている。具体的には、「広場」の支援のほか、組合員向け全員討議資料の発行(年1回)、「自主活動学習交流集会」(年1回、1996～)などである。全員討議資料には、生徒会や高校生へのアンケート調査も行われている。自主活動検討委員の教員のほとんどはN氏と同じ40代の中堅である。この年代は、学校や組合の中軸を担う一歩手前であり、それぞれ既存の実践に対して様々な疑問や不満をも抱えていることが多い。
- (11) 文化講座の講師をつとめた地域住民から、「高校生のいきいきした姿、今では見る機会がない。」という感想があった。このことは、普段はの素行の悪さしか見えず学校に抱え込まれた高校生の本来の姿が地域住民にはなかなか見えないことを示していると言えよう。

- (12) 「北海道高校生宣言」(全文)

1997年8月の余市、北海道各地の高校から180人の高校生が「高校生の広場夏の集い97 in 余市」に集まった。／何かを求めて・・・／高校生を見る大人の目—たとえば「じょしこうせい」への偏見の目。

マスコミの言っているのがすべてじゃない。／この集いを見てほしい。／人 出会い 平等 自立／人がいてすきな出会い／ひとりひとりが主人公／あなたは人ですか?／という集い宣言を決めた。

タイコ・おどり・手話／自分の好きなことを自分で選んでやりとげた。／一人一人が主人公であるために集い委員会を参加者の中から選出し、みんなの声を反映させた。／2日目には臨時全体集を開いて、先生方に

要望を出して、本当の自立が少しだけ見えてきた気がする。／つくしのように毎日背を伸ばしながら・・・

1997.8.3 一夏の集い in 余市ー

- (13) 9.24 教育道民大運動。以下 9.24 と略す場合もある。北海道高教組を事務局に 30 人学級や地方の高校統廃合反対など北海道の子どもたちにゆきとどいた教育を実現させる運動を大きく広げることを目的に実行委員会形式で行われている。地域の父母や市民、教師との教育懇談会を 5000 箇所で開催することや、2000 年 9 月 24 日の大集会（真駒内アリーナ）へ 5000 人の教師・父母・子ども・市民を集めることを目指した。集会では、3 部形式で小中高、養護学校など子どもたちのアトラクションや各層の発言を行った。そのうち、第 1 部の 45 分は群読を中心とした子どもたちのアトラクションで構成し、裏方を「広場」OBOG の青年が、群読やアトラクションの一つを「広場」の実行委員が担当することになった。
- (14) A～J は 2000 年 12 月及び 2001 年 9 月に 1～3 人ずつ聞き取り調査を行った。
- (15) 「広場規約」（1996 年改正・一部抜粋）

前文

あなたは何故学校に行ってるんですか？何かしてみたいことはないですか？そして、あなたはいま自由だと思いますか？言いたいことが言え、やりたいことがやれてますか？私たちは学校の中でも一人一人が主人公です。各個人が大切にされ信頼できる仲間がいる。学校とはそんな場所ではないでしょうか。子どもの頃の私たちは、たとえ知らない子でもすぐに一緒に遊んだりすることができました。しかし、その時の心は今となってはなくなってます。けど、少し忘れていただけかもしれません。だから、その時の心呼びおこし初めて会う人に声をかけて話したり遊んだりしてみませんか？

「北海道高校生の広場実行委員会」では全道の高校生が知り合い仲良くなるための場を作り、色々な友達や思い出経験を作ってもらうために活動しています。

第 3 条 本会の主旨はこの四つです。

自分を成長させる場をめざします

北海道内の高校生同士の交流の場をめざします

自分の意見を議論できる場をめざします

一つのことをみんなで成し遂げる場をめざします